



研究論文 (Articles)

夫婦関係構築プロセスが性行動に及ぼす影響と その心理的意義

——— 中年期男性の事例から ———

畑 中 美 穂

(東亜大学大学院 総合学術研究科)

Impact on Sexual Behavior and its Psychological Meaning Through
Development Process in a Marital Relationship: A Case Study

HATANAKA Miho

(Graduate School of Integrated Science and Art, University of East Asia)

The purpose of this study was to find factors which have the impact on a motivation for a sexual behavior and to consider what kind of the meaning the sexual behavior has on mentality by looking back to the way how a middle-aged married couple has built their relationships. Data from semi-structured interviews with a middle-aged man were analyzed by employing the Trajectory Equifinality Model. In this case, the results showed that the sexual behaviors were affected by overcoming couple's critical situation and by shared thoughts throughout life events. Because he has a respect on his wife, his thoughts that he wants to keep well-being relationship with his wife caused psychological change, and as a result they ended up with the sexual behavior which they could feel love toward wife. There are two facts ; the well-being relationship between couples leads to the continuous sexual behavior, and such relationship builds up well due to such continuous sexual behavior. It is suggested that these facts have to coexist and cannot exist without the other for the well-being relationship. In addition to it, his love toward his wife develops the solidarity in sexual behavior, and the sexual behavior becomes involved in the meaning of personal psychological developments.

本研究の目的は、 中年期の夫婦の関係構築プロセスから夫婦の性行動に影響を及ぼすものを探り、 性行動が個人の心理面においてどのような意義を持つのかを検討することである。方法は、 1名の中年期男性を対象にインタビューを行い、 複線径路・等至性モデルを用いて分析した。その結果、 性行動には危機の乗り越えや共通のライフイベントを通じた共有する思いが影響することがわかった。また本事例は妻に対する尊敬の念を持っており、 妻との関係を良好に保ちたいという思いが心理的な変容につながり、 妻への愛おしみを感ぜられる性行動を行い得るに至った。夫婦の良好な関係は性行動を継続して行い得ることにつながり、 また性行動を継続して行い得ることで夫婦の関係が良好に育まれることが示唆された。また、 妻への愛情が性における連帯性を育み、 性行動が個人の心理的な発達といった意義にも関与することが示唆された。

Key Words : a middle-aged man, sexual behavior, TEM (Trajectory Equifinality Model), interview, a married couple

キーワード : 中年期男性, 性行動, TEM (Trajectory Equifinality Model: 複線径路・等至性モデル), インタビュー, 夫婦

I. 問題と目的

婚姻とは、「一对の男女の継続的な性的結合を基礎とした社会的経済的結合」(新村, 1998)と明記される通り、性は夫婦の関係における重要な要素の一つであると考えられる。性のもつ意義について益田(新道, 2003)は、「生殖性」、「快楽性」、「連帯性」を挙げており、このうち「生殖性」と「快楽性」は生物学的なものとして動物にもみられるものとしている。一方、「連帯性」は精神性や社会性とも呼ばれるものであり、人の性行動においては多くが生殖とは関係のない行為であることから、コミュニケーションや人間関係、連帯感を深めていくものとしての意味合いが強く、「お互いに愛し合い、信頼し合った人間関係の中でより深まる」(新道, 2003)とされる点が特徴的である。夫婦関係について述べる際には、性行動の視点を外しては論じきれない面が存在する(例えば、長津・濱田, 1999; 十倉, 2005)。一方で、性行動の問題に触れることのタブー視による聴取の困難さ(河野, 2012)が指摘されており、夫婦の関係と性行動の関連に関する研究の課題であると言えよう。

夫婦の性行動に危機となる状態が訪れやすいのは、まず結婚早期では、出産前後の性行動の中断からの再開の時期およびその後、順調に継続されるようになるまでの時期であろう。夫は妻の妊娠中から感染予防や体位等について安全な性行動への配慮がある(山内・高間・林, 2016)上、経過が良好な場合であっても産後一か月頃までは母体の保護のために性行動は避けなければならない(森・高橋・工藤・堤・定月・坂上・大月・渡辺・亀井・香取・新井, 2012)。一方で夫は、妻にみられるような心身の変化はないため、性交回数の減少といった不満が生じる(大井・富田・高村, 2002)など、この時期に夫婦の双方がお互いについて理解し合い配慮をすることは重要であると考えられる。日本家族計画協会(2015)の報告では、婚姻関係にある男女の44.6%がセックスレスであり、そのうち、セックスレスの理由として「産後なんとなく」を挙げる者が男性の15.7%、女性の16.8%として注目している。出産前後の一定期間、性行動の中断がやむを得ない時期はあるもの

の、セックスレスの常態化はセックスの再開を困難にすると同時に、長期にわたると離婚や別離といった状況に移行しやすい(新道, 2003)。小野寺(2005)は、夫婦間の親密な感情は親になって2年の間に下がると報告しており、それに関連する要因として、夫の側からは妻のイライラ度合いが強いことと夫の労働時間が長いことが、妻の側からは夫の育児参加が少ないことや子どもが育てにくいことを挙げている。夫婦共に生活に余裕がなく、親密性が低下した状況で性行動を円滑に行い得るとは考え難く、結婚の早期に夫婦の良好な関係を構築することは家族ライフサイクルにおける発達段階の観点からも重要であると考えられる。

また更年期においては、性行動に生殖の目的はなくなり、男性は勃起障害、女性は性交時痛といった性交障害が生じるなど身体面での転換期を迎え、性行動を行う上で互いの心身の変化への理解と配慮を必要とする。更年期に関する45歳から60歳の夫婦を対象とした調査では、性行動の重要性について「重要」「どちらかといえば重要」と回答したのは夫63%に対して妻45%であり、コミュニケーション不足や全般的な夫婦の認識の違いが指摘された。また男女ともに半数がセックスレスの定義に当てはまる“性行動が月一回未満”の状態であった(野末・安井・関谷・横山・村瀬, 2001)。さらに心理学的な観点からは、個人ライフサイクルにおける中年期危機とも言われる心理面での転換期(下山, 2009)は重要な発達の危機期であり、岡本(小川・齋藤・鑑, 1990)は、「人格の成熟・統合の方向と退行・破滅の方向への分かれ目であり、この危機をどのように対処し、乗りきるかによって人生後半期の実り豊かさや人格の深化が得られるかどうかが決定的とも考えられる」と述べている。このような個人的変数に加え、夫婦関係は社会的・文化的変数が強く関係した個別性が高いもの(河野, 2012)であるが、特に夫個人の心理学的側面の理解を目指した研究は妻のそれに比べて極めて少なく(藪垣, 2009)、中年期の夫婦関係に関する研究の課題であると言える。

夫婦の関係における重要な要素の一つである性行動の、人に特有の意義である連帯性は夫婦の関係構

築プロセスの中でどのように生まれ、心理面にどのような意義をもたらすのか。このことを明らかにすることは、人が幸せに生きていくために性行動がどのような意味を持つのかを理解するための一助となるのではないかと考える。本稿では、中年期の夫婦の関係構築プロセスを辿り、どの時点で、あるいはどのような事柄が夫婦の性行動に影響を及ぼし、性行動が個人の心理面にどのような意義をもたらすかを明らかにすることを目的として一中年期男性の事例を元に検討する。

II. 方法

1. 用語の定義

◇性行動：益田による「性交の前後に行われるすべての行為が含まれ、キス、愛撫（ペッティング）、性交、避妊などの行為を総称」（新道，2003）との定義を本稿でも採択する。

◇中年期：心理学的観点からレビンソンの定義では「40歳から65歳くらいまで」とされている（下山，2009）が、中年期前期・後期の間に認められる質的な差異がある（藪垣，2009）ため、本稿においては「55歳から65歳」とする。

2. 研究デザイン

本稿の目的に沿い、時間を捨象せずかつ性行動が個人的な要素が強いという性質に鑑みてTEM（Trajectory Equifinality Model: 複線径路・等至性モデル）の手法を用い、中年期男性の個人の事例について分析した。TEMとは、個人の変容を社会との関係で捉え記述しようとする文化心理学の方法論（安田・サトウ，2012）であり、時間上の変容・維持の過程を描くことが特徴である。サトウは、TEMは、変数を理解しようとする研究とは異なり、生きた現象や経験を捉えることを目的として人生のプロセスを扱うところに特徴があると述べており（荒川・安田・サトウ，2012；サトウ，2015）、個々人のライフ（生命・生活・人生）に関するテーマについて、その人が生きてきた時間を重視しながら考える方法である（安田・サトウ，2012）。

TEMによってライフストーリーを描くにあつ

ては幾つかの基礎となる概念を用いる。まず、EFP（Equifinality Point：等至点）とは、非可逆的な時間の流れの中で生きる人の行動や選択の径路は複数存在すると考えられるが、歴史的・文化的・社会的な制約によって、ある定常状態に等しく辿りつくポイントのことである（安田・サトウ，2012）。また径路の複線性・多様性への理解を促すために、“等至点の補集合的な事象として意味のある両極化した等至点”としてP-EFP（Polarized Equifinality Point：両極化した等至点）を設定する（安田・滑田・福田・サトウ，2015）。また経路が複数発生した場合の、その元にあるポイントであるBFP（Bifurcation Point：分岐点）（安田，2015）や、ある特定の集団に属する多くの人が、論理的・制度的・慣習的・結果的に経験せざるを得ないポイントであるOPP（Obligatory Passage Point：必須通過点）（サトウ，2009）がある。またSPO（Synthesized Personal Orientation：統合された個人的志向性）は、個人の内的な欲求や意志を強調したい場合に用いると有効な概念であり、“目標に向かって絶えざる努力を行う力”を概念化したものである（安田他，2012前出）。これらの概念を用いてTEM図を作成し、一中年期男性の夫婦関係構築プロセスを表した。

3. 対象者および倫理的配慮

対象者は、本研究の目的および倫理的配慮に関する説明に同意を得た50歳代後半の男性A氏である。筆者とは知人を介して面識があり、既婚であることと職業以外のプライベートな情報は皆無であった。また筆者とは、①遠方に居住しており、仕事上あるいは日常の生活での接点がない、②妻とは面識がなく、今後も出会う可能性はない、という関係である。家族構成は、同年齢の妻および成人して自立した2人の子であり、妻とは結婚当初より共働きで面接時現在に至る。

対象者を1名としたのは、TEMで「1・4・9の法則」と呼ぶ「分析対象となる事例数によって捉えられる特徴が異なっている」ことを踏まえ、個人の経験をつぶさに捉え、可能な経路や選択肢も、その人の経験に忠実に描き出すことができるという特徴に鑑みてのことである（安田，2015）。また、対象者

の話を、TEM図を元に丁寧に聴くという趣旨から、サトウ（2015）が推奨する「Trans view」の考え方に則って3回のインタビューを行った。

本研究の倫理的配慮としては、所属における承認を得ると同時に、対人援助学会における研究倫理事項に則って行った。協力依頼に際しては、本研究の目的、インタビュー内容を録音し逐語録を作成したいこと、音声データや逐語録は研究以外の目的に使用しないこと及び保管は厳重にすること、個人を特定しうる情報の一切を筆者以外の人間が知ることはないこと、学術的な目的以外に音声データ及び逐語録を使用しないこと、プライバシーの保護や守秘義務について最大限の配慮をすること、結果をフィードバックすることを研究協力者に説明した。また、答えにくい質問には答える必要がないことを説明した。これらはインタビューの際に再度、口頭・書面で説明し、同意を得て調査を行った。

4. インタビュー方法

インタビューは、201X年12月から201X+1年3月にわたり、半構造化面接の形で計3回、A氏の指定した場所で筆者自身が行った。A氏には毎回、面接時に録音することの許可を得た。インタビュー項目は、第1回面接では暫定的に等至点を設定した上で作成した。第2回以降は暫定的TEM図に則って作成した（表1）。また第1回面接ではA氏にライフラインを描いてもらい、それに沿って質問を行った。ライフラインとは、自分が生きてきた道筋を、自分が感じた幸福感の高低によって1本の線でつないでいく自分史であり、出来事よりも、それらを現在の自分がどのように捉えているかを重視する

ものである（河村，2000）。ライフラインは2本であり、それぞれについて以下のように定義し表記する。

- 1) 《人生ライン》：ライフイベントについての語りを中心としたライフライン
- 2) 《夫婦関係ライン》：夫婦の関係についての語りを中心としたライフライン

5. 分析方法

分析は以下の手順で実施した。

- 1) 録音した音声データをデータ化し、KJ法（川喜田，1970）の手順を参考に段階的に抽象度を上げていき、意味のまとまりごとにグループ化した。それらをカテゴリー化したものを元に、TEMを用いて分析した。なおデータのカテゴリー抽出までの手続きは、質的研究の経験のある大学院生に協力を得た。また、折々でスーパービジョンおよびグループスーパービジョンを受け、研究の質の向上に努めた。
- 2) EFPとして〔妻への愛おしみを感ぜられる性行動を行い得る〕を、それに対するP-EFPを〔妻との性行動に意義を見出せず必然性を感じない〕と設定した。EFPに至る径路について、BFP、OPP、SPOをそれぞれ設定した。またこれらの概念以外に、①夫婦関係構築にとって良好に働きかけ、プロセスを辿る際に影響を及ぼしたと考えられるA氏の思いや認識について語られたフレーズを抜き出してラベルをつけたものを“A氏の所懐”，②辿った経路に相反しない愛情や性に関するA氏の思いや状態を“相反しない愛情状態”，③“性行動を継続して行い得た基盤となるA氏の所懐”を、それぞれTEM図上に記載し、可視化した。

表1 面接の概要およびインタビューの内容

	面接時間／形式	インタビューの内容
第1回	1時間45分／半構造化面接 *右記①、②の2本のライフラインを描いてもらい、それを元にインタビューをする。	1) 妻との出会いから現在に至るまでの、 ①ライフイベントを中心とした経緯 ②夫婦の関係を中心とした経緯 2) 性行動と心理面での夫婦の関係について
第2回	1時間20分／半構造化面接 *暫定的なTEM図を元にインタビューをする。	1) 暫定的TEM図の確認 2) 性行動と心理的結びつきに関する詳細な聞き取り
第3回	1時間10分／半構造化面接 *修正を加えた暫定的なTEM図を元にインタビューをする。	1) 修正を加えた暫定的TEM図の確認 2) 前2回の聞き取り内容を補完するための聞き取り

3) A氏が選択した径路を実線で示した。また実際には選択されなくても理論上は存在し得ると考えられる径路を破線で示し、可視化した。

4) A氏がフリーハンドで描いた2本のライフラインは、高さを数値化して置き換えると同時に、横軸の時間と各プロセスが整合するよう図式化し、TEM図の下段に描き加えた。

Ⅲ. 結果

A氏が〔妻への愛おしみを感ぜられる性行動を行い得る：EFP〕に至るプロセスを図化した（図1）。このEFPに至るプロセスについて、核となる家族の形成期（第Ⅰ期）、夫婦の関係に社会的な要因からの影響を受けた時期（第Ⅱ期）、夫婦が中心となり新たな関係を構築していく時期（第Ⅲ期）としてプロセスを記述する。以下、文中ではTEMの基本概念およびカテゴリーを〔 〕、A氏の語りを〈 〉、文献からの引用を「 」で示した。なお、個人の特定を避けるために、論旨に影響しない箇所を一部変更して示した。

◇ 各時期におけるプロセス

1) 第Ⅰ期：核となる家族の形成期

〔結婚：OPP〕後、第二子の誕生頃までの夫婦の関係についてA氏は、〈新婚そのもの〉と表現しており、〈夫婦関係ライン〉も最上のレベルで描いている。しかしその後、〔仕事と家事・育児を両立する妻の負担が増大する〕ことにより、妻の不満が増大し、〔妻が離婚を考える〕に至る。ところがA氏は〈会話が減った〉、〈何か怒っている感じ〉というように妻の態度に違和感を覚え、〈何か（妻との関係が）おかしくなった〉ということは感じていたものの、妻が離婚まで考えているとは〈気づいていなかった〉。そのため、自身は仕事の多忙さはあったものの気晴らしに要する機会は設けて休日も不在のことが多く、一方の妻は、〈そういうことに振りかえられ〉ず、〈必死になって子育てして〉いたために、〈二人の間のギャップ、価値観の相違やすれ違いがあった〉。性行動に関しても、そのような状

況下、〈そういう気持ちになれなかったと思う〉と語っており、〔性行動への意欲の減退〕により頻度の減少がみられた。折しも、〔突然の義母の死により、妻への精神的支えの必要性を自覚する〕状況が生じ、夫婦の関係についても〔話し合うきっかけができる：BFPI〕。結果的に義母には、〈危機を乗り越えさせてもらったような気がする〉と語っており、夫婦の関係が改善して〔妻の状況が理解できる〕という径路を辿った。

2) 第Ⅱ期：夫婦の関係に社会的な要因からの影響を受けた時期

〔昇進により仕事中心の生活となり、家庭のことを構わない〕ようになり、仕事に関しては充実していたものの、家庭においては、家事は元より〈子どもものことにしても肝心なところしか関わってないような気がする〉など、〔表立った不和はないが（夫婦の）関係に違和感を覚える〕状況であった。この時期に、相次いで〔実父および義父の死によりお互いに精神的支えが必要と感じる〕経験をしており、〈お互いにフォローが必要〉と感じている。その後、〔妻の昇進により家事負担が増大〕したため家庭の在りようが変化し、A氏の負担が増えた。A氏が家事分担不公平感を覚え、〔妻の働き方に不満を抱き、生活の必然のため家事をこなすものの、〈自分たちの生活を犠牲にしてまで（しななければならないのか）〉という思いが生じる。しかし同時に、〔妻の状況自体は理解でき〕るため、情緒面でのサポートを受けにくい状況で〔妻の働き方への理解と不満のジレンマ〕を抱えていた。不満を言うに言えず、〈だんだん積もってきて〉、〈時々、もう、“うーっ”てなるしかなくなってくる〉と苦痛であったことを語った。

その一方でA氏は、妻が、仕事や家庭における役割の中で、日々〈一生懸命にやっている〉姿に接し、〈ああ、これは自分にはできない（し、自分が）、そんなことを考えるかなあ、（自分とは）違うなあと思う〉、〈やっぱりこの人はこういう人なんだ。すごいなあ〉と認め、〈尊敬〉の気持ちを育てていった。それは、〈決して、昔から持っていないわけじゃないんだけど、だからもっと、深まってい

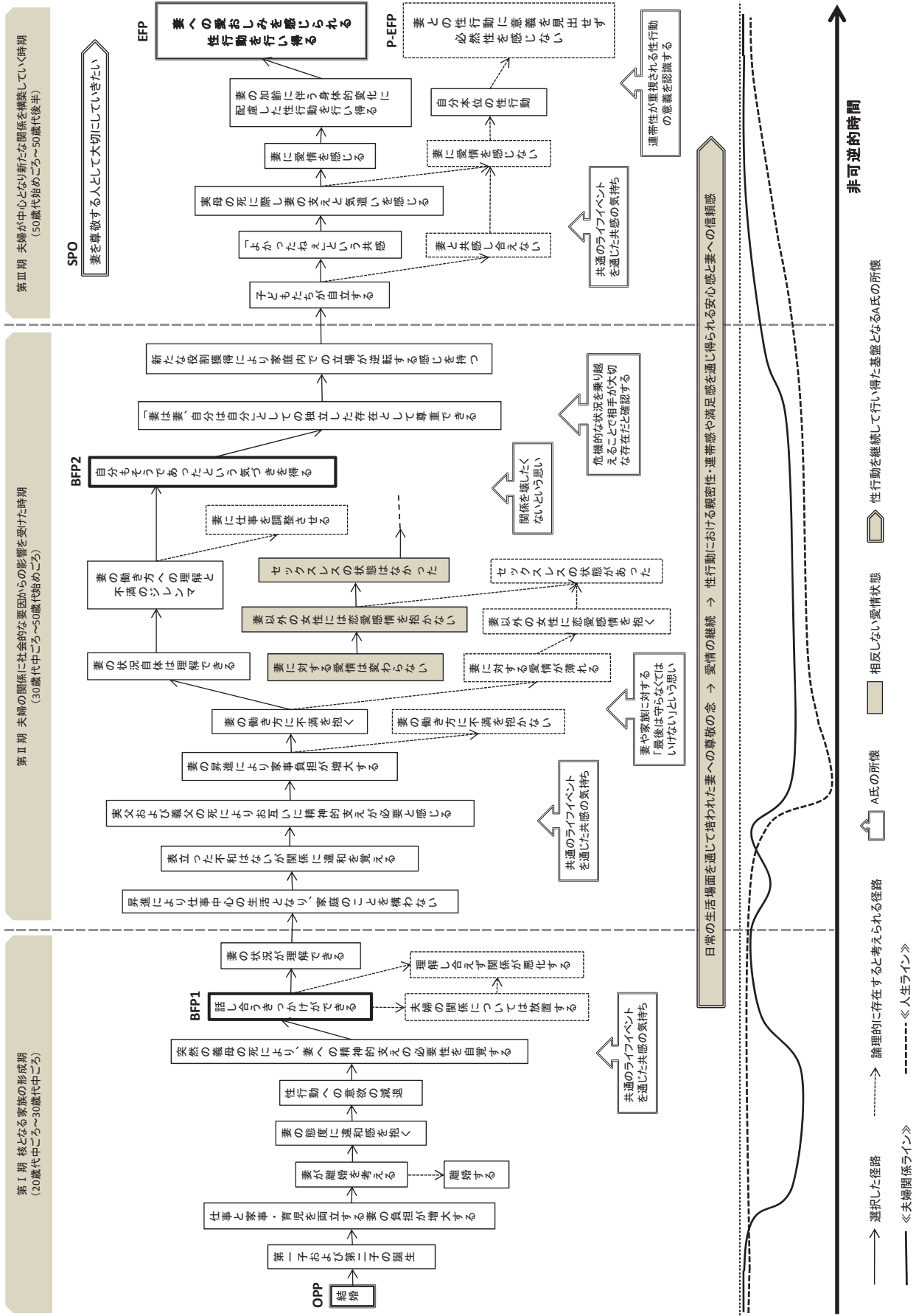


図1 夫婦関係構築プロセス

とか、いろんな方面に広がっていくとか、しているんだらうと思う」と語っている。例として親の死に際しての気遣いや、母親としての子どもへの配慮など「生活の中でみえてくることである」と述べ、培われてきたものであることを示唆した。このように妻に対する「尊敬の念」を愛情の基盤として抱いているため、A氏の「妻に対する愛情は変わらず維持され、性行動も継続された。またA氏は、性行動における言語による愛情表現やボディタッチなどを通じた親密性の中で、連帯感や満足感を覚えており、妻との性行動で得られる重要なものとして「安心感」を挙げている。そのため「妻以外の女性に恋愛感情を抱く」といったことはなく、「子どもが生まれたことは大きい」、
 「最後には（家庭、妻や子どもたちを）守らないといけないと思っている」と語り、妻からの愛情を疑ったことも「ない」とのことであった。これらが相互的に関与して、「セックスレスの時期はなかった」と結びつけている。

このように過ごす中で、過去にはA氏自身が「昇進により仕事中心の生活となり、家庭のことを構わない」時期があったことに思い至り、「それこそ、自分のこの時期と同じで、妻は家庭のことを全然振り返っていないんだと思う」と相手の立場に立って考えてみることに至り、「自分もそうであったという気づきを得：BFP2」た。夫婦相互に不満の溜め込みや吐露としての小さな諍いと、気持ちの持ち直しや理解といったことの「繰り返しがあって、ああ、そういうものなんだ、どちらかがやっばりやらなくてはいけない時期ってきっとあるんじゃないかと思う」と語っている。そして「相手のために（家事を）やっている時間というのはある」が、「夫婦だけど、一緒にというのではなくても」、
 「その中でもちゃんと自分のやりたいことをやる時間も確保できるというふうに考えてこれたような気がする」と、互いに縛られない生き方を模索することによって、夫婦の役割についての認識が変容した。それは単に作業としての家事について述べているだけではなく、「妻は妻、自分は自分」としての独立した存在として尊重できる」こととなり、「新たな役割獲得により家庭内での立場が逆転する感じを持

つ」ようになるという径路を辿った。

3) 第三期：夫婦が中心となり新たな関係を構築していく時期

家庭内での役割について「お互いができることをやる」という思い方ができることにより、「夫婦関係ライン」も上昇し、安定的に経過した。家事分担では妻との協力関係において立場の逆転を感じるが、「そのことを不満に思うことはない」と語っており、肯定的に受けとめることができるようになった。日常生活場面では妻に対する気遣いを行動で示し、「些細なことを大切に」して「積み重ね」ることで妻の気持ちに寄り添い関係を育んでいる。また「子どもたちが自立する」ことにより、妻との間で、親としての「「よかったねえ」という共感」をし合えた。さらに「実母の死に際し妻の支えと気遣いを感じる」など、「妻に愛情を感じる」経験を積み重ねている。A氏は妻のことを、「出会った時からずっと好きという気持ちは変わらない」と述べており、性行動においても、「妻の加齢に伴う身体的変化に配慮した性行動を行い得」ている。これらのことが総合的に関連し合って、「妻を尊敬する人として大切にしていきたい：SPO」という内的な方向性を示しており、「妻への愛おしみを感ぜられる性行動を行い得る：EFP」に至る径路を辿った。

IV. 考察

1. 夫婦関係構築プロセスが性行動に及ぼす影響

本事例では、「妻への愛おしみを感ぜられる性行動を行い得る：EFP」に至っているが、A氏と妻は必ずしも常に順調な経緯を辿ってきたとは言えない。結婚の早期では、先行研究（小野寺、2005）にもあるように、A氏も、自身の育児参加の少なさや妻の苛立ちといった夫婦間の親密性の低下に関連する要因に言及しており、「性行動への意欲の減退」がみられている。しかし一方で、約30年間にわたる結婚生活の中で、妻の出産前後や体調不良等の明らかな理由のある時期を除き、セックスレスの状態は「なかったと思う」と述べており、第二子誕生後の「性行動への意欲の減退」の時期においても、頻

度の減少はあったものの性行動の継続はみられた。セックスレスの常態化がセックス再開の困難や離婚や別離といった状況に移行しやすいという新道(2003)の報告に鑑みても、また、セックスレスの理由として挙げられる「産後なんとなく」の状態(日本家族計画協会, 2015)に照らしても、A氏に性行動の継続がみられたことは夫婦関係の維持・継続の面からも重要であると考え。A氏が辿ったプロセスについて、“性行動を継続してきたことは愛情の深化や危機的な状況の修復・改善に良好に作用したと思われるがどうであるか”を尋ねると、<そういう面もあるだろうと思います。ただし、そればかりじゃないような気がする。愛情を深めるっていうのは、敬う念というか、そういうのがないと愛情というのにはならないだろうし、その方が大きいような気がしますね。感情面というか、“家族のために”とか“私のために”とか、そういうところで彼女が働いてくれているっていうのが、何か、尊敬に値するとか、“やっぱり彼女でよかった”とかいう思いにつながっていくような気がします。セックスも大事なかもしれないけど、それよりも、そういう面があってのことじゃないかなという気がする>と述べている。

例えば第Ⅱ期で、“妻に対する不満があるが、性行動は継続して行い得た”という状況は一見すると相反するようであるが、A氏の“不満”はあくまで〔妻の働き方〕についてのことであり、必ずしも愛情の薄れとはならず〔妻に対する愛情は変わら〕ずに持ち続けていた。むしろ妻への愛情や仕事自体への理解があるが故に、不満を昇華できないジレンマに苛まれ、また、家庭を省みてほしいという気持ちも強かったのではないかと推測される。このことは、〔妻に対する愛情が薄れ〕て〔妻以外の女性に恋愛感情を抱く〕といった性的な代替えの行動がないことや、自らの負担が大きくても家事の多くを引き受けてきたといった行動とも矛盾しない。さらには妻との〔関係を壊したくないという思い〕がA氏の夫婦の役割についての認識の変容につながった。

またこの時の状態が第Ⅰ期の危機的な状況と異なることは、第Ⅰ期では〔妻が離婚を考え〕ており、妻の側からの愛情が著しく薄れた状態で危機としては

より重大であった点である。〔妻の態度に違和感を抱く〕状況でA氏の〔性行動への意欲の減退〕がみられるのは自明であるが、突然の義母の死といったライフイベントにより、結果的に<危機を乗り越え>た。仮にそのような出来事がなければ、A氏の場合もどのような経路を辿ったかは不明である。このように考えると、いわゆる産後クライシスと呼ばれる出産後の夫婦関係の悪化により陥る危機や、中年期の危機に関連する離婚の危機といった夫婦の危機はA氏にも十分起こり得たと言え、いずれも乗り越えられてきたことには非常に意味があると考え。このことはA氏の妻に対する愛情があったことが大きいとともに、共通のライフイベントを経験することによる共感や支えあいによる関係の育みがあったことが大きく寄与していると考えられる。このような関係の上で、A氏は、性行動において互いに気持ちや希望を伝え合うことが、<よりよい性行動につながるというよりも、よりよい夫婦生活につながると思う>とし、<いい夫婦になればいい愛し合い方>ができるのではないかと語った。A氏の語りからは、夫婦の関係が良好であることで性行動が円滑に行い得、また性行動によって夫婦の関係が良好に育まれる好循環が生じることが示唆される。

またA氏は第Ⅱ期において、夫婦の関係についての認識が変容しており、〔妻は妻、自分は自分〕としての独立した存在として尊重できる〕に至っているが、このことは単にA氏が家事に慣れたということだけではなく、性別あるいは夫婦間役割についての認識や自らの価値観を見直すことになったと考えられ、意義深い。例えば第Ⅰ期では、仕事と家事・育児を両立する〔妻の状況が理解できる〕が、価値観の変容には至っていない。BFP2頃までの経緯をみるとA氏が元々、平等な性別役割観を持っていたとは言い難く、当時、家庭における自らの役割の中に家事の分担や育児、妻の情緒的サポートが含まれているとは認識していなかった。しかし、妻との関係を良好に保つために家事を積極的に担うことにより、長津(1991)の述べるように、個人の資源が開発されたことによって「夫婦間の役割関係の柔軟性を高め」たと言えよう。その結果、A氏の心理的な変容が起こり、夫婦の関係はより成熟したものと

なつたと考える。ホリス（2008）は、「関係の変容を可能にするためには、その前にまず、各自がより完全に個にならねばならない」と述べており、「自分の内面に向き合う勇気をもつとき、人は、自分自身のパーソナリティの、それまで見過ごしてきた部分に向かって開かれるチャンスを得る。パートナーに対して、人生の意味を実現してもらうよう執拗に欲求することをやめたら、そのとき人は、自分自身が潜在的にもっている可能性を活かすよう招かれるのである」と記している。さらに長津他（1999, 前出）は、「残された長い人生を共にする配偶者に対するディストレスを取り除き、支え合える関係性を育んでいくことは、それぞれのアイデンティティが拡散することなく自己の内部に統合され、より成熟したアイデンティティを獲得していくうえで重要である」と述べている。妻との関係を見直す機会があったことにより夫婦間のディストレスを取り除くことにつながり、妻も自分も独立した存在であることが認識できた。またA氏は親の死について、〈（夫婦の生活史といえ）大体みんな共通だから、片一方に何かあっても、同じように感じるというか、同じようにして（相手の痛みを）背負うのだろうと思う〉と語っており、共通のライフイベントを通じて互いに相手の気持ちに寄り添えたことで気遣いや労わり、支えの必要性についての自覚が生じ、愛情を育んだことが示唆される。A氏の「妻を尊敬する人として大切にしていきたい：SPO」という思いのベースとして、〈いろいろな人を亡くしていつているのもそう（関係ある）なんだろうね。自分たちが今度、亡くなる番だつていう（思いがある）のも、そうなのかもしれない〉と死を意識した上での妻への慈しみを表現する語りもみられた。これら個人資源の開発や共通のライフイベントを通じた共有する思いといったことは、一見すると性行動とは全く関係ない事柄であるが、岡本（2002）が、絶え間なく変容を遂げる日々の生活の中での関係性が「夫婦アイデンティティを成熟させていくための鍵」と述べていることに照らし、性行動を継続して行い得る上で重要であると考えられる。

2. 個人の心理的な発達における性行動の意義

A氏は、性行動の意味について〈愛情を確かめるってという意味もあるのかもしれないし、そのことによって愛情が深まるっていうふうに思っているのかもしれない〉と語っており、愛情の確認としての性行動の意味を見出している。同時に性行動そのものが大事であるというよりも、〈むしろ妻に対する尊敬の念がないと愛情にならない気がする〉と語っており、妻に対する〈尊敬の念〉が愛情の基盤となり、その上での性行動であると認識している。動物行動学者のモリス（1993）は、人間は「単に、異性の一員に備わった一連の生殖器と性交するだけではない。完成された特殊な個人と“メイク・ラブ”するのである。これこそ、われわれの種では、結合を含めたプロセスの全段階が夫婦間の絆の形成を強めるように働く理由」であるとし、人間の性行動の意義について述べている。またこのことが夫婦間に必然的に豊富で複雑なボディタッチをもたらし、人の性的親密性の基礎となったと述べている。A氏は妻に〈触れたい〉というボディタッチの欲求があることを率直に語っており、妻との性行動で得られる最も重要なものとして〈安心感〉を挙げている。さらに、「妻以外の女性では得られないだろうと思えるもの」について〈愛情をささやくとかいうことはそうなのかもしれない〉と語っており、ささやくという行為に含まれる言葉や行動が特別な意味を持っていることを語っている。逆に妻からの愛情を確かめられる反応についても、語りかけや強く抱きしめるといった行動を具体的に挙げ、妻の感情を表しているのではないかと語った。これら性行動の過程で経験される一連の行為には、連帯性に関連した親密な表現の要素や手段が含まれている。パートナーに対する表現でありながら呼応するものでもあるため、そこで得られる反応が自らの在りようを自ずと問うと言えよう。小野（2009）は、表現アートセラピーの中でクライアントが「からだを通して実感することで、感情と触れ、安全な環境の中でそれを受容し解放することが促進され、自己受容にもとづいた“他者への共感”、“平安”、“信頼”、“人生への肯定感”」に導かれる経験をしていると述べている。そして「表現アートセラピーにおけるからだの次元は、全人的

な回復を目指すうえで非常に大きな意味を持っている」とし、「真の自己（自己の核心）との乖離や隔離、断絶がない、自分自身を実感できる体験である。その体験こそ自己信頼の基礎となるものと考えられる」と述べている。A氏は性行動における相手の感情を明らかに確認できると断言できるかどうかは難しいとしながらも、“二人にしかわからない”＜言葉や行動＞に表れるものから確かめ合っているものがあることを語っており、長年の間に育まれてきた妻に対する尊敬の念が基盤となった性行動において、信頼や安心感、満たされた感じを抱いている。これらは性行動にはセラピーの要素に通じるものがあることを彷彿させ、A氏にとっての性行動が、妻を通じて「自分自身を実感できる体験」（小野, 2009）であることが示唆される。

A氏はまた、自らの性的な満足だけではなく、妻の加齢に伴う身体の変化に対して若い頃とは性行動の仕方が変化したことにも言及しており、性行動は、＜お互い気持ちが寄り添わないと難しいとは思ふ。今、こういう歳になってくると尚更かもしれない＞と語っている。A氏の言葉は、夫婦の性行動のもつ意味が生殖性や快楽性を中心としたものから、より精神性の高い連帯性を重視するものへと変遷していったことを表している。岡本（2002）は、「相手を全人格的に受容し尊重することの価値を意識すると、必然的に自己と他者双方の自己実現や幸福を視野に入れる必要性が高まる。このように、自己だけでなく相互適応という視点は、関係性の成熟度をとらえる一つの重要な物差しであると思われる」と述べ、配偶者との関係性を理解しようとする時に生涯発達の視座は不可欠であるとしている。面接の最後に、A氏に“このまま妻と添い遂げると思うか”について尋ねた時、A氏は＜そうだね。死ぬまで一緒だろうね。どちらが先に死ぬかというだけの話だろうと思う＞と語り、続けて、＜やっと本当に私たち2人だけの生活になって、私たち2人がまた楽しめるように、ここからはいろんなことをしたい＞と語った。双方ともに仕事を持ち、家庭では子育てが中心であって、これまで相手を労わりながら過ごしてきた経験に乏しいと感じている。今までにできていなかったことの振り返りと、残された人生での妻

とのこれからの歩みを大事にしようという想いを語っている。田垣は「複線径路は、史的事実が単純に再構成されたものではなく、現状からの過去の再構成と未来への方向付けである」と述べている。また「ライフストーリー研究の依拠する理論においては、語りは、単なる過去の再構成ではなく、語る時点の次の行為につながっていくものといわれている」としている（サトウ, 2009）。A氏についても、語りの機会を通じることにより、自身の人生についての再構成と未来への方向付けを行っている。A氏にとって大切なことは、語られたことが“物語”であるかどうかよりも、“今現在、A氏にとってどのように意味づけられているか”ということであり、将来を描く語りに結びつけられるかということである。ホリス（2008）は、中年期には自分の肉体的、感情的、精神的な幸福感（well-being）に責任を負うことが要求されており、成長や変化や「真の自分自身」を見つけるために内面への方向転換をしなければならないと述べている。A氏も、夫婦の関係を通じて「内面への方向転換」といえる変容が起こり、夫婦として“成長”する上でも、またA氏自身の発達段階上にとっても意義のあることであつたと考える。本事例では、性行動が個人の内的成長にとって重要な行為であり、個人としての発達課題を考える上でも有用に機能していることが示唆された。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、性行動という聴取の困難さ（河野, 2012）が指摘される事象を扱うものであったが、面接についてA氏が＜丁寧な話を聴いてくれた＞、＜話を受けとめてくださった＞と振り返られたように、徐々に性について話すことへの抵抗感が下がっていったことで得られた語りが多く、A氏が協力的であったことに依るものが大きい。またA氏にも、夫婦に一般的に起こり得ることの多い危機状況は存在したものの、夫婦の良好な性行動のパターンを語る理想的なモデルとして描くことができた。例えば別居状態にある夫婦や、婚姻関係は継続しているが性行動は行われていない事例について聴取する場合には特別な配慮を要することも考えられる。性とい

う極めてプライベートで繊細な内容について如何に語ってもらい、性行動という個性が高い事象から何を導き出していくことができるかということが今後の課題である。

V. まとめ

夫婦の関係構築プロセスから性行動に影響を及ぼすものを探り、性行動が個人の心理面においてどのような意義を持つのかについて、1名の中年期男性を対象にしたインタビューを行った。その結果、妻への愛情が土台となり、危機となる状況乗り越えることや共通のライフイベントの中で共有する思いが夫婦の関係に作用して性行動に良好な影響を及ぼすことがわかった。また夫婦の危機的な状況では性行動への意欲の減退がみられるなど、性行動を継続し得ることを阻害する状況がみられた。その一方で、本事例ではセックスレスの時期はなく、事例の、妻に対する尊敬の念が夫婦の関係を保つための重要な要素となった。また妻との関係を壊したくないという思いが家事能力の発揮といった個人資源の開発を促しただけではなく、妻の立場に立って考えることを通じて気づきを得ることとなり、事例の心理的な変容につながって夫婦の関係はより成熟したものとなった。これらが総合的に関連して、妻への愛おしみを感ぜられる性行動を行い得るに至った。

以上より、夫婦の良好な関係は性行動にも良好な影響を及ぼすため継続して行い得ることにつながり、また性行動が継続されることは夫婦の関係を良好に育むことに作用する可能性が示唆された。また、良好な関係のもとに行われる性行動は自己を確認できる経験として心理的意義にも関与することが示唆され、個人の内的成長にとって重要な行為であり、人としての発達課題を考える上でも有用に機能していることが示唆された。

謝辞

本研究に際し、長時間に亘り貴重なお話を伺わせていただきましたA様に深謝いたします。また研究にご理解いただきご助言いただいたO様・D様・Y様、

多くの示唆を与えてくださいましたK様・G様・S様、特に分析過程での多大なご協力と重要なお指摘やアドバイスをいただいた皆様、ならびにスーパーヴァイザーとしてご指導賜りましたM先生・U先生はじめ諸先生方に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012). 複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例. 立命館人間科学研究, 25, 95-107.
- ホリス, J.・藤南佳代・大野龍一 (共訳) (2008). ミドル・パッセージ 生きる意味の再発見. コスモス・ライブラリー.
- 川喜田二郎 (1970). 続・発想法. 中公新書.
- 河村茂雄 (2000). 心のライフライン 気づかなかった自分を発見する. 誠信書房.
- 河野俊彦 (2012). 「離婚」その潜在的要因 —経済と愛情の変化—. 佛教大学大学院 社会福祉学研究科篇 社会学研究科篇, 40, 53-70.
- 森恵美・高橋真理・工藤美子・堤治・定月みゆき・坂上明子・大月恵理子・渡辺博・亀井良政・香取洋子・新井陽子 (2012). 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 母性看護学2. 医学書院.
- モリス, D.・石川弘義 (訳) (1993). ふれあい愛のコミュニケーション. 平凡社.
- 長津美代子 (1991). 共働き夫婦における第一子出生にともなう対処 —常雇と自営の場合—. 日本家政学会誌, 42 (2) 127-139.
- 長津美代子・濱田由紀子 (1999). 中年期における女性の夫婦間ディストレス. 日本家政学会誌, 50 (8), 793-805.
- 日本家族計画協会 (2015). 機関紙「家族と健康」. 日本家族計画協会.
- 野末悦子・安井禮子・関谷透・横山博美・村瀬幸浩 (2001). 男も女も更年期から始めよう 976人に聞いたその時の変化, これからの準備. 学陽書房.
- 小川捷之・齋藤久美子・鏑幹八郎 (編) (1990). 臨床心理学大系 第3巻 ライフサイクル. 金子書房.
- 岡本祐子 (2002). アイデンティティ 生涯発達論の射程. ミネルヴァ書房.
- 小野寺敦子 (2005). 親になることにとともなう夫婦関係の変化. 発達心理学研究, 16 (1), 15-25.
- 小野京子 (2009). パーソン・センタード表現アートセラピーにおける「からだ」と「スピリチュアリティ」研究シリーズ ヒューマンサービスリサーチ, 15, 27-39.
- 大井けい子・富田真理子・高村寿子 (2002). 妊娠期の性生活 妊婦とその夫の性の認識と満足の差異. 女性心身医学, 7 (2), 220-225.

- サトウタツヤ (編) (2009). TEMではじめる質的研究 — 時間とプロセスを扱う研究をめざして—. 誠信書房.
- サトウタツヤ (2015). TEA (複線径路等至性アプローチ). コミュニティ心理学研究, 19 (1), 52-61.
- 下山晴彦 (編) (2009). よくわかる臨床心理学. ミネルヴァ書房.
- 新道幸恵 (編) (2003). 新体系看護学 第30巻 母性看護学① 母性看護概論・母性保健／女性のライフサイクルと母性看護. メヂカルフレンド社.
- 新村出 (編) (1998). 広辞苑第五版. 岩波書店.
- 土倉玲子 (2005). 中年期夫婦における評価ギャップと会話時間. 社会心理学研究, 21 (2), 79-90.
- 藪垣将 (2009). 中年期夫婦関係研究の展望 —システムズ・アプローチの観点から—. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 49, 307-316.
- 山内弘子・高間静子・林宏美 (2016). 妊婦に対する夫の役割行動実践度測定尺度の開発. 母性衛生, 56 (4), 599-608.
- 安田裕子 (2015). コミュニティ心理学における TEM / TEA 研究の可能性. コミュニティ心理学研究, 19 (1), 62-76.
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) (2015). TEA 理論編: 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ. 新曜社.
- 安田裕子・サトウタツヤ (2012). TEMでわかる人生の径路 —質的研究の新展開—. 誠信書房.
- (2017. 5. 1 受稿) (2018. 2. 7 受理)
(ホームページ掲載 2018年3月)